

評価実施年度	令和 6 年度	学校名	大分県立 大分鶴崎 高等学校	
学校教育目標	校訓「克己 友愛 創造」の体現 ～ 主体的に活動し、多様性を認め合い、挑戦意欲を持つ生徒の育成 ～			
重点事項	評価項目	評価の観点	評価	今後の改善方法(学校作成)
カリキュラム・マネジメントの確立	学校教育目標	○的確な学校経営ビジョンが策定されていて、学校教育目標の達成に資するために重点目標の焦点化が図られ、校長のリーダーシップの下、全教職員による教育活動が展開されているか。	・極めて良い。 ・学校目標や生徒指導の具体的な方向性やイメージが教職員間で共有されている。 ・生徒に対してより分かりやすい表現で説明している点が評価できる。 ・校長は校訓「克己・友愛・創造」に基づき、教職員や生徒に分かりやすいグランドデザインを提示している。	・今後も、スクール・ミッションに掲げられた学校の使命と、現状の教育課題を的確にとらえ、教職員間で情報を共有したうえで、方向性を導き出していく。 ・積み残している課題を解決するためにも、実施後にその効果を運営委員会で協議し、職員会議で情報を共有することで、次の取組につなげる仕組みを構築する。
	P D C A サイクル	○重点目標を達成するための焦点化された取組指標や達成指標等が適切に設定され、機能しているか。 ○取組指標や達成指標等の評価・検証を計画的に行い、以後の実践に直ちに反映させるなどP D C A サイクルが確立しているか。 ○予期しない課題が判明した時点で、その解決に向けて校内分掌が速やかに機能するように、組織的な責任・運営体制は整備されているか。	・改善が必要。 ・PDCAサイクルにおいて重要なのは、C(チェック)からA(アクション)への具体的な行動である。 ・アンケートを多く実施し、分析も行っているが、具体的な改善策が示されていない点が多い。 ・実行を伴い、次のステップのPDCAサイクルへ円滑に移行できるよう努める必要がある。 ・学校が定めた目標の達成度については、良好な結果を上げている。	・生徒アンケートに関しては、単なる数値の比較にとどまらず、具体的な記述を今後の改善策としてとらえ、教職員間で情報を共有し、具体的な改善策を決定し、実行する。 ・分掌主導のPDCAサイクルを効果的なものにしていくためにも、各取組に対する検証結果を踏まえたうえで、次年度の取組が行えるようにする。 ・重点目標の進捗状況について各学期ごとに確認を行い、運営委員会で協議したうえで分掌間の連携を図っていく。
	社会との連携・接続	○「開かれた教育課程」の理念に基づき、育成したい生徒像が家庭及び地域と共有されているか。 ・情報の伝達・公開を適切に行っているか。(ホームページ・SNSの活用、学校便りの発行等) ・生徒・保護者の学校への満足度や要望を把握する取組を行っているか。 ・地域内外の関係機関との連携や人材を活用しているか。	・極めて良い。 ・高大連携をはじめ、「総合的な探究の時間」等を活用し、地域との連携にも熱心に取り組んでいる。 ・卒業生や地域の人々から愛される学校として、生徒にとって誇りとなっている。 ・情報の公開や伝達において、他の模範となるような取組ができています。 ・ホームページや学校新聞等を頻繁に更新し、最新の情報を発信することで「見える学校」として機能している。 ・県内複数の大学との連携が取れており、両者にとっての深い学びに繋がっている。	・スクール・ミッションにあるように、地元へ根差した高校であるため、地域との連携をさらに強化していく。 ・行事毎のホームページの更新、「つるたか新聞」の毎月の発行を続け、より魅力的なコンテンツを設けることで、情報発信をさらに充実させていく。
主体的・対話的で深い学びの実現	授業の活性化	○授業の活性化が図られているか。 ・学ぶことに興味や関心を持ち、見通しを持って取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。 ・授業のねらいに応じて、言語活動の充実を図ることで、「対話的な学び」が実現できているか。 ・授業の中で、知識を相互に関連付けて深く理解したり、情報を精査して自己の考えを形成したりする「深い学び」が実現できているか。 ・ICTを活用して、授業の効率化や授業の振り返りにつながっているか。 ○総合的な探究の時間や課題研究の学びとその他の教科・科目の学びが有機的に結びついているか。 ○生徒の学習習慣が定着し、学力及び学習意欲の高まりがみられるか。	・良い。 ・常に主体は生徒であることを忘れず、全ての生徒に目を配る必要がある。 ・板書の際は生徒にとって参考書となることを意識して表現することと字を丁寧に書くことを心掛けて欲しい。 ・生徒に対する「発問の工夫」の成果が感じられる。 ・主体的な学びを実現するため、教員の努力が授業改善推進委員会の活動を通じて有効に生かされている。 ・ICTの「活用」は「使用」ではないことを意識し、効果的に工夫し、より意義のあるツールになると良い。	・年間2回ずつ実施している「校内授業研究会」や「互見授業」の内容をさらに効果的なものにするために、精選を重ねていく。 ・指導教諭を中心とした「授業改善推進委員会」の定期的な開催により、教職員各個人の授業スキルの向上に学校全体で取り組んでいく。 ・生徒に対する「学習実態調査」をさらに充実させ、学力の向上につながるタブレット端末の利用法などを推進できるように組織的な取組を行っていく。
安全・安心な教育環境	いじめ・不登校等の対策	○計画的な面談・相談を通して、個々の生徒の状況を理解した上で、生徒指導が学校の組織を挙げて行われているか。 ○いじめ・不登校防止対策に取り組む体制が整備され、いじめ・不登校問題に対して適切な対応がなされているか。	・極めて良い。 ・生徒指導は社会全体の環境や時代の流れを踏まえつつ、学校独自の環境を生かして対応できている。 ・生徒とのコミュニケーションは時間よりも回数意識し、いざというときに相談しやすい関係性を保つとより良い。 ・個別の対応が求められる状況も考慮し、面談や研修、協議を通じて、更なる努力を期待する。	・個人面談や日ごろからの声掛け等の工夫により、いじめや不登校につながる事案の早期発見を図る。個人面談については、繰り返し実施することで、何かあった時にすぐに相談できる信頼関係づくりにつなげる。 ・スクールカウンセラーによる生徒理解のための研修・スクールロイヤーによるいじめ対応研修など、研修内容をさらに時代に合ったものにして、教職員の力量を高める。
	安全管理	○学校施設等の安全点検や通学の安全指導及び教職員・生徒の安全対応能力の向上を図るための取組が定期的に行われているか。 ○学校事故や非常災害など、緊急事態発生時に適切に対応できるよう、危機管理体制が機能しているか。また、生徒の安全を確保するための具体的な取組が行われているか。	・良い。 ・部活動に熱心な生徒が多く、部活動数も多い。部室や活動場所の修繕等、安全管理に配慮が必要である。 ・ヘルメットの着用に関する取組は、交通安全教室を通じて生徒の正しい認識や行動の向上に繋がっている。	・校内安全点検の中に、部活動の部室・活動場所も含めて、安全管理に努める。 ・交通事故防止を図るために、年度当初に1年生を対象に、関係機関との連携による交通安全教室を実施する。
信頼される学校づくり	働き方改革	○生徒と向き合う時間を確保し、生徒に対して効果的な教育活動を行うことができるよう、働き方改革が推進されているか。 ・会議・分掌業務、学校行事の精選、見直しを図られているか。 ・組織的な指導・運営体制の構築と学校の活動方針の徹底等による部活動改革に取り組んでいるか。 ・情報共有の効率化や校務情報化の推進など、ICTの効果的な活用によって業務改善が図られているか。	・定時退勤日について保護者へのメール周知で理解を求め、ワークライフバランスの推進と実現に繋げている。 ・働き方改革として職員朝礼の週1回への削減や会議の整理等を行い、改善が進められている。 ・年休取得や定時退庁については、全教職員が達成できるよう努めることを期待したい。 ・「例外」は全体の風土に影響を与えるため管理職の適切なリーダーシップと学年主任等の指導が求められる。 ・働き方改革については、依然として社会環境自体の変化による支援が必要である。	・定時退勤日を徹底するために校時を繰り上げたり、行事予定や行事の詳細を早めに提示したりする等、教職員が計画的に業務を遂行できる体制づくりに、管理職が分掌主任・学年主任等と連携して取り組む。 ・毎月の定時退勤日の取組について、引き続き39メールで保護者に周知することで、教職員の勤務改善への意識を共有していただき、協力を仰いでいく。
	学校課題の解決に向けた取組等	○キャリア教育を生徒の人生の一部として取り組んでいるか。 ○スクール・ミッション及びスクール・ポリシーの達成に向けた教育活動が計画されているか。	・キャリア教育を「生き方全体の指導」と捉え、総合的な探究の時間を活用し、将来を考える一助となっている。 ・キャリア教育が単に就職支援に終わらぬよう、3年間を見通した計画を立てることが望まれる。 ・生徒会活動は一部の役員だけの仕事ではなく、全ての生徒と教員がともに創り上げるものであると考える。 ・校則についても、時代や新たな常識に合わせ、互いに納得のいく形で構築することが望ましい。 ・スクール・ミッションやポリシー達成へ向け、教職員間で共通理解を図り、指導の個人差をなくす必要がある。	・3年間を意識したキャリア教育を見据え、内容の精選と、適切な時間配分を考える。 ・生徒会活動の活性化を図るために、各委員による日常的な取組を大切に、教職員もともに協力する。 ・校則については、易・不易を生徒自身に考えさせ、要望書の提出・協議・合意形成等の手順を経験させ、シチズンシップの育成を図る。 ・スクール・ミッション、スクール・ポリシーを、各分掌・教科の目標や取組に反映させるなどして、教職員全体での意識の共有を図る。
総合評価	<ul style="list-style-type: none"> ・学校が地域にとって愛され、応援される存在となっている。生徒もそこで学ぶことに誇りを持ち、学校生活や地域との関わりを通して、自らの将来像を具体的に描きながら日々の学校生活を送っている様子が伺えた。 ・地域にとっても重要なランドマークとなっており、ここで学び、ここで生きていく生徒の育成に繋がっている。 ・今後は、更に一人ひとりの生徒の心に寄り添い、対話を重ねながら、学校と生徒が共に成長できるよう、生徒指導面での教育活動に重点を置いて取り組むことを期待したい。 ・第1回の評価時より明らかに前進している。PDCAサイクルにおける具体的な改善、地域との連携強化、ICTを活用した授業の活性化、いじめ・不登校への個別対応力の向上、そして事故ゼロを目指す安全管理の徹底には更に期待したい。 ・教職員の更なる働き方改革と業務の適正化(ホワイト化)、そして生徒の生涯を支える地域の重要な教育機関としてのプレゼンスが、これまで以上に求められているため、今後の継続した取組に期待したい。 			
校長コメント(次年度の改善策)	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」を社会に開かれたカリキュラムマネジメントの柱に位置づけ、3年間を見通した指導計画を構築する。 ・生徒会活動のさらなる活性化を通して、生徒の批判的思考力や論理的説明力の向上を図り、よりよい主権者の育成に努める。 ・安全管理については、防災教育を一層推進し、自助・共助・公助を踏まえ自ら命を守る生徒を育成する。 ・PDCAのC(チェック)からA(アクション)については、これまで以上に具体的な改善策を決定し、周知する。 ・教職員の働き方改革の推進が、教職員自身の人生や授業の質の向上に通じ、さらに生徒によりよい教育ができる教育環境の循環を図る。 			